

## ベリンスキーの「国民性」論

ナロードニクスタ

藤井一行

一九世紀の三〇年代から四〇年代にかけては、一四年にわたって展開されるベリンスキー（一八一—一八四八）の批評活動を観察するに、リアリズムや傾向性とならんで彼が一貫してつよい関心をよせた問題もしくは批評の原理に「国民性」がある。しかし、わが国や欧米はもとより、ソ連の研究者においても彼の「国民性」論に十分な注意がはらわれてきたようにはみうけられない。

本稿での筆者の課題はベリンスキーの「国民性」概念の内容をさぐるとともに、これを支える問題意識やその意味についてつたない観察を試みることである。

ロシア文学史において「国民性」(народность)なる概念は必ずしも同一の内容をもつわけではない。ベリンスキーにおける「国民性」の概念は、彼の継承者といわれるドブローネフや、革命後のソ連の文学者におけるごとき、国民の利害や願

望の表現ではなく、ロマン主義者におけるごとき、民族の独自の性格の反映を意味する。

ベリンスキーがその処女作『文学的空想』(一八三四)において試みる規定によれば、文学の「国民性」とは「国民的容貌の刻印」を意味する。しかし、この「国民的容貌」は国民の既成のなんらかの「容貌」をただちに意味せず、その存否自体が問われねばならぬような性質のものである。彼によれば、ロシアの場合、「国民的容貌」は「国民の下層」に存する。それは「賤民の風俗、慣習、考えかた、感じかた」に表現され、故に文学はこれを描くときに「国民性」を得る(ソ連科学アカデミー版・ベリンスキー全集第一巻九二頁。以下「S」のごとく略記)。

ベリンスキーがここで「国民的容貌」を「国民の下層」にみとめるのは、ビョートル大帝(在位一六八二—一七二五)によるロシアのヨーロッパ化的改革がそれまで一体的な「国民的容貌」を持ってきた国民の「国民大衆」と「上層社会」への分裂を惹起し、前者はロシア古来の生活を固守し、一方、後者はロシア的なものをすべてを忘れてヨーロッパ模倣に終始してきたために「容貌」を欠いていると考えたことによる(S, 37—40; 92, 94)。こうして、彼は一方で当代の「国民の下層」の、他方でビョートル改革前のロシア国民の生活を描くときに文学は「国民性」をうるとする(S, 92)。「わが国民性はさしあたりロシアの生活の絵図の描写の忠実さにある」という命題の少くも一の意味はここにある(S, 93)。

ところが、彼は他面で、国民を構成するのは「賤民」だけで

ないばかりか、「国民の最高の生活」は「上層」に存するのであり、「賤民」のみを対象とすることは一面的であるとするとする。しかるに、この「上層」はビョートル改革このかた「明瞭な形象と性格」を有せず、故に文学の対象となりがたい。その意味で彼は文学における「国民性」はほとんど期待しがたいと論じる (I, 92)。

以上の所論から知られるようにペリンスキーは『文学的空想』において実は相異なる二種の「国民性」を念頭においている。そして、後者の場合に彼が想定するのは、「対象と内容にかかわらずなくあらゆる創作品にひとしく発現するであろうようなロシア的活動の特殊な精神と方向」(I, 93. 傍点筆者) もしくは「国民の知的容貌」、「ロシア的精神」(I, 102)であったと見られる。そして、このような「国民性」がひとたび形成されるとき、文学の「国民性」もおのずから現出する (Ibid.)。この場合、ペリンスキーにおいて後者の「国民性」こそ本来的なものとして想定かつ重視されているように見えることに注意したい。

ところで、四〇年代のペリンスキーはややちがった「国民性」論を展開する。彼は「国民性」のほかに「民族性」なる概念を新たに用い、ことに『ビョートル大帝の事業』(一八四一)や『アレクサンドル・プーシキンの作品』第五章(一八四四)では両者の意識的区別を試みる。『ビョートル大帝の事業』での規定によれば、「国民性」は「民族性」の上位概念であって、「国民」は「国家の下層」を、「民族」は「国家の全階層の

総体」を表わす (V, 121)。このような概念規定はすでに論理的な誤謬を含むが、さらに、この規定の前後にみられる所論はこれと一致しない。彼はキルシャ・ダニエロフの歌謡は「社会の上層(もっとも教養ある)階級」にも理解されるがゆえに「国民的」であり、プーシキンの作品はこの階級にしか理解されず、「国民」の理解にはおよばぬがゆえに「民族的」だとする (V, 121—122)。同種の論法はプーシキン論の第五章でもくりかえされる (VII, 332—333)。また、彼はビョートル改革によって教養ある「上層」が出現した結果、改革前の「国民」は国家的意味ではすでに「民族」に転化したとも述べる (V, 122—123)。こうした所論はペリンスキーが実際には教養の有無によって両者を区別していることを察知させる。

だが、享受者の理解力の観点からする文学作品の「民族的」と「国民的」の区別の試みはそれ以上に発展させられてはいない。「国民性」と「民族性」の実例上の区別も先の概念規定とは一致せず、「国民性」は国民の原始的状態を、「民族性」はその根底にあって国民の歴史的展開の基軸をなす「実体」を意味する (V, 122—124)。具体的には「国民性」はビョートル改革前の「野蛮」状態や「国民大衆」のそれを意味し、そのかきりで彼が『文学的空想』で述べた第一の場合の「国民的容貌」に近いが、ただ、以前とちがって彼はこれにたいしてきわめて否定的である。「民族性」については未来におけるその偉大な発現を予言するが、その具体的内容を示していない。だが、ここでもそれはヨーロッパ文明に培われたロシアの精神的独自

性として彼の脳裏に描かれているようにみえる (V, 127)。

以上の論著にみられる「国民」と「民族」の、また「国民性」と「民族性」の区別は、ほぼ時を同じくして書かれた他の諸著作ではなされておらず、いずれも同義の概念として用いられているように見える。しかし、このさいの「国民性」論には従来にもまして明瞭な世界的な文明比較の視角が導入されている。

彼は文学にたいして「人類的」もしくは「世界的」であるところの「国民性」をもとめる(『民衆詩論』(一八四一) V, 305—306)。『ロシア文学にかんする感想と論評』(一八四六)ではペリンスキーは「ロシアの民族性はロシアの詩人が自己の作品に全人類の理念を表現しつつ、そこに民族性の鋭い刻印をきざみうるにはいまだ十分に形成され」ていないとする (IX, 438)。このことが彼をしてプーシキンやゴーゴリにいかなる「世界史的意義」も認めさせない (IV, 558, VI, 422)。

だが、文学の「世界史的意義」の欠如は作者の責任ではない (VI, 259, 422)。民族的であって世界的な詩人は「人類の運命において世界的役割を演ずべく、即ち、自己の民族的な生活によって人類全体の歩みと発展に影響を及ぼすべく使命づけられた諸国民」にのみ生れうる (IX, 440)。この場合、彼の言う「世界史的役割」とは、「未来においてわれわれは勝利せる剣のほかさらにロシアの思想をもヨーロッパの生活のはかりにかけるであろう」(IX, 441—442) ということが示すように精神文化の領域にかかわるものとして想定されている。『一八四

六年のロシア文学観』(一八四六)においては彼は「国民性」のみの要求をも、「人類的」のみの要求をもともに斥けて、両者の融合としての「国民性」を主張するが、このときも、それはロシアにすでに存するところのなにかとしてではなくて、未形成の「自己のごとく」、「自己の思想」として想定されている (X, 21)。このように、四〇年代のペリンスキーが世界的視角においてあるいは「全人類の理念の形式」としての「民族性」を、あるいは「人類的」と一体化した「国民性」をもとめようと、帰するところは初期と同じく精神文化の民族的・独自の重視と要求にほかならない。そして、ペリンスキーは、このような「国民性」がそなわるときこそ、国民は「人類の運命において世界史的意義を演じうる」のであり、そのとき文学もおのずと世界的な「国民性」を得ると考えるのである。だが、すでに見たように、彼によれば、そうした「国民性」はロシアで形成されておらず、故にその文学的発現は期しがたい。故に、彼はここでもロシア文学における「さしあたり」の「国民性」をロシアの国民生活の忠実な再現にみいださざるをえない(『一八四七年のロシア文学観』, X, 294)。しかし、この場合の「国民性」は必ずしも初期におけるような国民大衆の容貌を意味しない。

## 二

もともと「国民性」論は二〇—四〇年代のロマン主義的インテリゲンチヤに共通して見うけられるものである。「国民性」

への希求がロシア文学に生じたのは、「すべての者がわが模倣の文学の脆弱さをげげしく感じ、国民的文学を創造せんと欲した」ことによると、ベリンスキーも指摘しているように (T, 91)、たとえば『詩歌にかんする若干の感想』(一八二五)において、文学の歴史には「独創的詩人」と「模倣者」のみしか存せず、文学の本質はそれが「真の、自主的な」文学か否かにあるとし、「おのれのうちなる奴隸的模倣の精神を根絶しよう」とよびかけたルイレーエフをはじめ、二〇〜三〇年代の多くのインテリゲンチヤは自国の文化の模倣性の克服を切実な課題としていた。四〇年代に形成されるにいたったいわゆるスラヴ主義にしてもビョートル改革にはじまるヨーロッパ化の歪みへの批判を出発点としている。ベリンスキーの「国民性」論も一九世紀前半のロシアのこうした文化意識としてのナシヨナリズムの動向につらなるものと考えねばならない。

ロシアについて彼がいだく歴史認識や未来像に注意するとき、彼の重大な関心はヨーロッパ世界にありつつ、ロシアはなおいかにしてロシアたりうるかという問題にあり、そのさい、「現在」を招来したものととしての過去のビョートル改革にはじまるロシアのヨーロッパ化の過程がつけねにかえりみられていることに気づく。

『文学的空想』において、ビョートル改革はヨーロッパ文明世界から隔絶されて未開な生活を送ってきたロシアにヨーロッパの「多年にわたる文化の結実」を摂取すること、これを「人類の一般的生活」の中にくみいれるという世界的意義を

もつものと評価される (T, 37-39)。しかし、それは、また、彼がなによりもその運命を気づかう「上層社会」(教養階層を意味する)のヨーロッパ模倣への熱中、「明瞭な形象と性格」の欠如を結果したとされる。ロシア文学もこの改革の必然的な結実としてロモノソフに始まるが、彼も「他国の文化の輝きに魅惑されて祖国にたいして眼をとざした」(カ、七一)のであり、わずかの偶然的現象をのぞけばそれ以後の文学の歴史はヨーロッパ文学の模倣の歴史にすぎないとされる。

四〇年代のベリンスキーにおいては、ビョートルによるロシアのヨーロッパ化の改革は、原始的・野蛮的を意味する「アジア的」状態からの救出を意味し、ヨーロッパ化はいわばヒューマニゼーションとして意味づけられ(『ビョートル大帝の事業』V, 91)、この意味でのロシアのヨーロッパ化はまた将来にわたっての課題ともされる。『一八四六年のロシア文学観』に見られる「アジア的でないというただそれだけでヨーロッパ的なものに狂喜することを止め、ヨーロッパ的なものが人間的であるというただそれだけでのみこれを愛し、尊敬し、ねがい、この基礎のうえで人間的なものを欠くヨーロッパ的なものはすべて人間的なものを欠くアジア的なものをすべてを斥けるのと同様の力をもってこれを斥ける」(X, 19)という主張はたんにヨーロッパ文明の外面的模倣の否定を示すばかりでなく、「ヨーロッパ化」の新たな意味づけ、即ち、翌年の『ゴゴリへの手紙』に吐露される農奴制と専制政治の撤廃の要求に通じるロシア社会の民主的変革への志向を含むと考えられる。

しかし、その一方で彼はビョートル改革がもたらした、彼の時代になお続くところの「歪められたヨーロッパ主義」、国民の「無性格性」をみのがさない。また、四〇年代のベリンスキーはロシア文学について新たに自主性への漸次的発展の動向をみいだすようになるが、模倣性からの脱却の努力が彼の時代になおつづけられていることを同時に指摘している（『批評論』（一八四二）、VI. 296）。

彼は『文学的空想』で「われわれにはやがて自己の、ロシアの、国民文化が生れるだろう。われわれは他国の知的後見の必要を持たぬことをやがて証明するであろう……われわれは自己の文学をもち、ヨーロッパ人の模倣者ではなくして敵手として現れるだろう……」（I. 102—103）と述べるが、そのことは、彼が初期にすでにロシアの精神生活の「無性格状態」、ヨーロッパ模倣性を将来にわたって克服さるべき事態と自覚していたことを示すものであろう。

以上に考察したロシアの未来への道の両面をおそらく考慮して、ベリンスキーは「ロシア的ヨーロッパ人」ならびに「ヨーロッパ的ロシア人」への自己形成をロシア人の課題として提起するのである（『ビョートル大帝の事業』（V. 144））。

このように、ベリンスキーにおいてもまた、ビョートル改革以来のロシアの国民ことに知的階級にみられる模倣性や無性格性の自覚が総じて民族的自主性への志向をみちびいていると見られるのであり、彼の「国民性」論自体はこの意識に支えられての、さまざまな自主性を資質とする自主的な国民文化や文学

の探求にはかならないと考えられるのである。<sup>(8)</sup>

### III

ベリンスキーがロシアの自主的な国民文化や文学の形成を考えるとき、念頭をいつも去らないのは精神生活における民族的自主性であった。それは彼の時代にはいまだ存在しないとしても将来におけるその実現の可能性については彼はいささかの疑問もたず、その実現への道をひたすら教育の普及にみようとする（I. 102; VII. 620）。しかし、彼はこの教育の内容や方法についてまでは論及していない。真にヨーロッパ文化の敵手たりうる国民文化や文学の形成は将来の課題として残される。それについての彼の努力はすでにその「国民性」論にみたとき、問題の重要性の執拗な指摘とその論証にもっぱら捧げられる。

これにたいして、彼は、「さしあたり」可能な国民文学の形成の道をリアリズムによるロシアの生活現実の再現にみだし、自己の最大の努力をリアリズム論の展開に注ぐ。この場合、フオークロアを重視するロマン主義者とちがって、ベリンスキーはいわゆる「伝統的」文学にはきわめて否定的である。

『民衆詩論』でベリンスキーは国民の幼年期の所産たる「自然的詩歌」が成年期に「芸術的詩歌」へ成長をとげるのは前者に「一般的なもの」がみちているときのみであるが、ロシアの「自然的詩歌」はこれを欠いているとみる（V. 310）。しかし、ロシアの「自然的詩歌」の貧しさは国民の生活が「一般的内容」に欠けていることに由来する。そして、この「一般的内容」に

みちた生活がロシアではじまるのはヨーロッパ文明世界への合  
体からだとは彼は考ふる (V, 306)。そこから、彼は「貧しい民  
衆詩の単調な形式は古代ロシアの種族的、直接的、半家父長的  
生活の狭い内容を表現するには十分であったとしても、新しい  
内容は新しい形式を必要とした」(一八四六年のロシア文学  
覽『X, 14』)として、口碑文学の源泉に靈感をくんで、新たな  
ロシア文学の殿堂を築こうとの試みのむなしさを説き、伝統な  
るが故の伝統の継承を斥けるのである。

かくて、彼はあくまでヨーロッパ文学の伝統の上での「芸術  
的詩歌」の成長を期待する。そして、ほかならぬこの期待が否  
応なしにロモノソフ以来のヨーロッパ的な文学——模倣性の  
色濃くとも——の歩みのなかに自主性への動向を再発見するこ  
とを迫るのだと見られる。そのさい、彼が、この動向を「生活  
の散文の、創造という真珠への結晶」即ち、リアリズムの方向  
へとすすみつつあるものと見た(『批評論』V, 308)ことは、  
ロシアの生活現実の忠実な再現に文学の「国民性」をもとめた  
ことと考へあわせるなら、彼は自主的な国民文学の形成の道を  
リアリズム文学にもとめたのだ、と言えるであろう。それはシ  
ェイクスピア・セルバンテスの築いたヨーロッパ文学の最大の  
達成の伝統の継承を意味していた。

## 四

一九世紀前半のベリンスキーをはじめとするロシアのインテ  
リゲンチヤに自国の社会や文化の運命にかかわる思索をよびさ

ましたものについて、欧米の研究者は西欧の、ことにドイツの  
ロマン主義思想の影響を指摘しがちであり、一方、ソ連の研究  
者はしばしばこの影響を否定してきた。しかし、影響の否認が  
史実にもとるとすれば、「影響」なる現象自体が多かれ少かれ  
歴史的なものである以上、たんなるその事実のみの指摘もまた  
無意味であろう。

一九世紀前半のロシアの知的動向は十八世紀末の「文明開  
化」の歪みへの反省期の到来としてとらえうるものであるが、  
かくのごとき文化史的状况への開眼はなによりも「一八一二  
年」によって触発されたと考えねばならない。ナポレオン軍の  
侵略はロシアの民族意識を深々とゆりおこした。ロシアの勝  
利、国際政治上のロシアの発言権の増大、ヨーロッパ社会との  
再会は複雑なナショナルリズムの覚醒をもたらすが、とりわけ民  
族意識に培われた文明比較の眼は、政治的に「偉大な」ロシア  
の精神的空白の自覚と精神的「偉大さ」への願望を、さらにロ  
シアの政治的変革への希求をうみだす。この自覚と願望が「現  
在」を招来したところのピョートル改革にはじまるロシアの  
「近代化」の再検討と、それを通しての祖国の未来図の模索を  
迫る。そして、これらの過程をたすけたものが類似の問題状況  
にあって苦闘したヨーロッパの先人や同時代人の思索の結晶だ  
ったのだと考へられよう。

ひるがえっておのれをかえりみると、今日のわが国の文化  
史的状况はある面でベリンスキー時代のロシアのそれに類似す  
るといえないだろうか。明治維新以降のヨーロッパ文明の輸入

によるこの国の「近代化」とその歪みの過程はあたかもピョートル改革以降のロシアのそれを想わせる。その意味で、われわれはペリンスキーにたいしてトインビーのいわゆる「哲学的な同時代人」であるとも言えよう。言いかえれば、われわれのペリンスキー研究がこの国の歴史的現実<sup>(10)</sup>に深くねざすとき、「歴史の経験の旅程において一步を先んじた」同時代人たるペリンスキーはこの国の運命にかかわるわれわれの思索をやはりたすけてくれるのではあるまいか。

もとより、彼我の問題状況の異質性が看過されてよいのではない。ペリンスキーにおいて、文明比較の対象としての世界が西ヨーロッパ世界を意味したにすぎぬとすれば、われわれは、なによりも、世界がまさしく世界を意味し、西欧の没落のすべにおおいがたく、かつての「非文明世界」が世界の指導者の地位にとつてかわりつつある時代の世界との対決のなかでこの国の未来をさぐり、かゝ策いていかなるをえまい。

(1) この十年間に欧米で刊行された R. Hare, *Pioneers of Russian Social Thought* (London, 1951), H. Kohn, *The Mind of Modern Russia* (New York, 1955), E. Lampert, *Studies in Rebellion* (London, 1957) 等の著者はそれぞれペリンスキーに一章を充ててゐるが、「国民性」論を中心とするペリンスキーの思想にはほとんどなほ關心を示してゐない。H. Bowman, *Vissation Belinski* (Harvard University Press, 1954) はこの問題にもかかわりの注意をはらひ、またわりに公正な観察を試みてゐる研究

書と思われるが、問題追求の意欲があまり感じられない。一般に欧米の研究者においては偏見ともいえる主観的な価値判断が対象の客観的・個性的把握を妨げがちのように見える。一方、ソ連での、ブレハーノフ以来のペリンスキー研究の主たる関心は極言すれば、彼がマルクス主義にいか接近してゐたかの問題の政治・哲学・歴史・美学思想の各方面にわたる究明にあつたと見え、そのためか、「国民性」論への関心はうすく、かりにこれをとりあげたとしても、その観察はこまかくも鋭くもなく、またたんなる平板な言及にとどまるきらいがある。一例をあげれば、*История русской литературы, AH СССР, т. VII, 1953.* のペリンスキーの章はこれをまったく黙殺してゐる。マ・ラヴレンスキーの「国民性」論に相当の注意をはらつてきた数少い研究者の一人であり、とりわけペリンスキーの美学の体系化を図つた近著 *Эстетика Беллинского, 1959.* は「国民性」の問題をきわめて詳細に観察してゐて、有益な示唆に富む。

(2) Н. А. Добролюбов, *О степени участия народности в развитии русской литературы* (1858); Д. И. Тимофеев, *Проблемы теории литературы* (1955), стр. 152~154. Д. В. Шелихова, *Введение в литературоведение* (1956), стр. 45 など参照。ソ連でははかに民族的性格を意味する национальность なる術語が使われる。

- (3) A. Лаврецкий, Эстетика Белинского, стр. 298, 322 — 323. 以下に近き解釈をなす。
- (4) Ibid., стр. 300.
- (5) К. Ф. Рылев, Стихотворения. Статьи (Москва, 1956), стр. 301.
- (6) A. Лаврецкий, "Историко-литературная концепция Белинского", Белинский. Историк и теоретик литературы (1949), стр. 54; Н. Копп, The Mind of Modern Russia, Chap. II.
- (7) АН СССР. История русской критики (1958), т. I, стр. 388. にも同様の指摘がみられる。
- (8) ラヴレツキーはヘリンズキーにおいて「国民性」が「民族的自主性」を意味することは指摘するが、「模倣性」の問題は独立の意義を失ったとみてゐる(前出論文「六一頁」)。しかし、ヘリンズキーは筆者と同く見解を述べざるをうにみえる(前出書「一八〇—二〇二頁」)。
- (9) たとえば A. Koyré, Etudes sur l'histoire de la pensée philosophique en Russie (Paris, 1950), Hegel en Russie. は「外国の影響の新しい波の到来」をもってロシア「精神史」の時代区分をなそうとし、またヘリンズキーをはじめとするロシア・インテリゲンチヤにおけるヘーゲルの影響をいかにめぐりめぐりていかに R. Wellk, "Social and Aesthetic value in Russian Nineteenth-century Literary Criticism" Continuity and Change in Russia and Soviet Thought (1955), B. Brown, "The Circle of Stankevich," The American Slavist and East European Review, 1957, No. 3. ヘリンズキーにせよ、ヘイマン・ロマン主義思想の影響の大きさとその有意義性を指摘してゐるが、かれらはこの「影響」を可能ならしめたところの歴史的現実まで考察を及ぼすことをしてゐない。
- 他方、ソ連の従来のロシア思想史・文学史研究ではヘーゲル思想の影響の事実が黙殺もしくは否定される傾向が強かった。最近ようやくこれにたいする自己批判がたとへば M. T. Иовчук, "Диалектика Гегеля и русская философия XIX века", (Вопросы философии и) 1957, No. 4. によつて提出されるに至つた。なお拙稿『ヘーゲルソフのヘリンズキー研究』(『歴史学研究』第二二〇号)参照。
- (10) A. J. Тойнビー『試煉に立つ文明』(深瀬基寛訳)『社会思想選書』二二頁。(一橋大学大学院学生)